慶長茶湯秘聞

海野弘

慶長茶湯秘聞

海野弘

慶長茶湯秘聞（けいちようちやとうひぶん）　海野　弘

発行者／角川春樹　印刷所／横山印刷　製本所／鈴木製本
発行所／角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
〒102　振替　東京3-195208
電話　営業部 03-3817-8521
　　編集部 03-3817-8451
平成3年4月30日　初版発行

Printed in Japan

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-04-872621-8 C0093

一　四条河原茶わん陣　九
二　秘茶〈緑の川〉　二一
三　織田有楽斎　四四
四　有楽屋敷茶会　五七
五　女人茶湯　七〇
六　桐姫　八〇
七　京都豊国祭　九〇
八　夏の終り　一〇六
九　洛中と洛外のはざまに　一一一
十　清茶教秘史　一二九
十一　かぶき者　一三三
十二　黒い茶会　一四六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十三　もう一つの茶道　一五六
十四　伊賀への潜入　一七三
十五　伊賀騒動　一八五
十六　キリシタン禁令　一九八
十七　大久保長安事件　二〇七
十八　殉教の時　二一七
十九　吉岡憲法　二三七
二十　剣技の美女　二四一
二十一　大坂いくさ　二五一
二十二　叛乱と再会　二六三
二十三　有楽への別れ　二七三
二十四　緑の川への旅立ち　二七九

装丁　奥村靫正

慶長茶湯秘聞

「慶長十年三月一日。四条河原にて水占。吉兆。待ち人来る」と私は『朱平日録』を読みはじめる。しかし慶長十年とはいつのことなのか。そして読んでいる私はどこにいるのか、私はだれなのか。私は慶長十年から数百年過ぎた時にいる。ではこれは過去の歴史であり、古い物語なのだろうか。

これは私たちに伝えられた物語だ。そして私は後から流れてくるものだ。慶長十年に私はまだずっとかなたにいて、ここに達していなかったのであり、この物語は私のずっと前にあったのだ。とすればこれは過去の歴史であるだけでなく、未来の物語でもあるのだ。これは十七世紀に茶の湯の世界に生きた若者の物語だ。私はそれを読みはじめる。私はすでにそれを知っている。なぜならそれは古い物語であるからだ。しかし私はそれを知らない。なぜならそれはこれからつくられる物語であるからだ。慶長十年はすでに過ぎ去った時でもあるが、これからやって来る時として、私が待っている時でもある。私は後から流れてきて、先にやって来ているものに出会う。そしてさらに後からやって来るものを待ちつづける。

では過去の歴史としての慶長十年（一六〇五）はどのような時代か。織田信長の登場で戦国が終結し、天下が統一される。しかし天正十年（一五八二）本能寺の変で信長は

倒れ、政権は豊臣秀吉に移る。千利休は秀吉の茶頭として活動する。天正十三年、秀吉は北条氏を滅ぼし、全国を制定する。そして海外進出を企て、文禄・慶長の朝鮮出兵を行なった。その間に、秀吉の逆鱗に触れた利休は天正十九年、切腹している。だが秀吉も慶長三年に急死し、徳川家康の時代となる。家康は慶長五年の関ケ原合戦に勝利すると、豊臣方の大名八十七家を断絶した。慶長八年、征夷大将軍となり、江戸幕府を開いた。

西洋では宗教戦争の時代が終ろうとしている。オランダが独立する。ヨーロッパ人は東洋に進出しつつある。中国では満洲の女真が明を脅かしている。明末清初の民衆叛乱がつづく。その中には白蓮教徒の乱もある。

慶長十年の背景をなしているのはこのような時代だ。後から流れてきた私は、そのことを過去の歴史として読む。しかし私はその失われた時を変わらない歴史としてではなく、新しい物語として語ることにしよう。私はまだ慶長十年になにがはじまるか知らず、なにかを待っているのだ。読むことはいつか語ることになる。その時私は歴史の外にいるのではなく、物語の中に生きているのだ。私は過去の歴史を、古い物語を、夢を語るように、読んでいくことにしよう。その時、彼の物語は私の物語となる。そう、私もまた四条河原にたたずみ、彼を待ちつづけている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　四条河原茶わん陣

春の水が流れていた。浅瀬は金粉をふるっている篩のようにきらめいていた。少年は水に入って、波のさまざまな形と色に目をこらした。黄や茶、藍や緑の波紋が見えた。水音がごうごうと耳にひびいている。白銀の水流の線が、ぜんまいのようにくるくると巻いてはまたほどけてゆく。小さな階段状に並んですべってゆく水面を、光が一段ずつ上ってゆく。水のうなりの中に、いくつかの音を聞き分けられるように思える。そして散乱する水中の光の中に、血のように赤い色や、金剛石の虹色が見えるような気がするのだ。

今日はきっと来る、と少年は思った。いつも、この四条河原にくると、そう思えるのだが。ぼくは待ちつづけてきた。その人がどんな人なのか、どのようにやってくるのかわからなかった。だが、その人が来れば、ぼくにはすぐわかるだろう。少年はひざまで水の中に入っていって、水流をのぞいた。五彩の糸がもつれているように、さまざまな色がくるくると変っていた。少年は水気を読み、浮かんでくる卦を読んだ。そして左手に握っていた草の葉を投げた。岸辺でむしってきた草の葉は水面にひろがって、花のように開いた。しばらくそのままの形でとどまり、やがて、形をくずして、散り散りに流れ下っていった。

少年は息をつめて水面を読んでいた。「芙蓉の卦」が出ている。次に右手に握った草の葉を投

げた。草は二つに分れて落ち、向きあうように巴形にくるくるまわった。「双龍の卦」であった。少年はうれしそうに笑った。水占はいいしるしをあらわしていた。少年は水の中に、さらに多くのものが読めるように思えた。

だれかに呼ばれたように、少年はふりかえった。岸辺には春の日ざしが降りそそぎ、人々が群れ、小屋が並び、かなたには青みがかった山々が見えた。ぼくを呼んだのはだれだろうか。四条河原をあふれるように埋めつくしている人々は、だれも水に入っている少年に気がつかないようであった。

左手には茶屋があった。水の上に張り出した床がつくられ、頭をまるめた、俳句の宗匠か茶湯者のような風体の男と、商人風の男が川の風景を眺めていた。彼らの前には二つの茶わんが置かれ、給仕の少女が盆を捧げて、なにかをすすめていた。少年は彼女の長い髪が川風にゆれているのをかわいく思った。茶屋の入口は土間になっていて、床几に二人の客が坐っている。大きな茶釜が据えられ、湯をたぎらせている。傍らには、いくつかの茶わんと茶道具が並べられ、その背後ではおかみが、土間の方と、川床の方の両方にぬけ目なく気を配っている。

茶屋の隣は、動物の見世物小屋らしかった。幕の隙間から、熊の檻や、吠えている犬や猿が見えた。その前の通りには、ぜいたくな小袖を着て、かぶりものを長くたらした身分の高そうな女性が歩いている。侍女がうしろから傘をさしかけており、そばには、うしろに帯を長くたらした女の子がいる。あたりの人たちはこの女性に見とれ、どこの姫君か、富豪の奥方かと想像している。茶屋に坐っている二人の客のうち、編笠をかぶった年配の男は川の方を見ているが、その連れらしい前髪の若衆は、ふりかえって、この女性を眺め、女の子の方を見つめている。女の子のそばで白い犬がきゃんきゃんないているが、おそらく向い側の見世物小屋の熊におびえているの

だろう。

傘の女性のうしろにも、その連れらしい二人の女がいる。一人はやや年配ではあるが、ちょっとしゃれた着物を着て、うちわを持っている。もう一人は、髪を長くし、振袖の若い娘である。彼女たちを二人の遊び人風の男が興味を持ってつけている。二人とも扇子を持っているが、一人は着流しで、一人は、かなり高価な羽織を着ているので、彼が旦那であろうか。この色男は、頭に扇子をかぶるようにあてて、貴婦人を見送っている。

四条河原には、春の快楽の匂いが漂っていた。女たちは季節に浮かれてそぞろ歩いていた。男たちはそれに誘われて、河原に集まった。そして女と男のために、茶屋や芝居小屋、見世物小屋がここにできていた。

扇子をかざした色男が立っているのは、芝居小屋の前である。ここでは若い女たちの歌舞伎踊りが評判になっている。出雲からきた阿国が人気を集めつつあった。

川辺では茶屋の隣に、水中に柱を立てて、川に張り出した廊下のようなものがつくられていた。人々はそこを渡って、川のまん中に出て、急流や、水中の魚の姿を見て楽しんでいた。稚児と小坊主を連れた前髪の若衆が、そこからなにかを投げると、水中にいる数人の子どもたちがそれを争って拾っていた。きらりと光るところを見ると、豆銀でも投げているのだろうか。銭を投げている若者と、それを水の中で拾う子どもたちの間にそれほどの年の差はなかった。

桟橋のそばには、ござを敷いただけの、露店の茶店があった。やはりここでも、川の上に床が張り出してあり、そこの手すりにもたれて、女の子が、川で銭を拾っている子どもたちを眺めていた。茶店の前には、茶わんを上にのせ、下に茶道具を入れた茶棚が置かれ、隣には風炉の上に茶釜が掛けられていた。そして大きな水がめがあり、柄杓が置かれていた。釜の前には一人の女

が坐っていて、客に茶をいれてくれるのであった。彼女は片ひざを立てた姿勢をしていた。

河原にはぶらぶらしている人ばかりではなかった。やや下流では洗濯をしたり、馬を洗っている人たちもいた。舟を漕いで、桟橋に着け、荷の積み下しをしているものもいた。少年は川から上ると、少し冷えたので、煎茶を一杯飲みたくなった。座敷には上らず、店先で立って飲んだ。熱いだけがとりえの薄い茶であった。黄緑のお茶が身体に流れこんでくると、しみるようにあたたかくなった。少年は、厚ぼったい粗末な茶わんを静かに台に置くと、「ありがとう」といった。茶汲女は、その丁寧なしぐさをおどろいたように見て、「いい飲み方するねえ、もう一ぱいいかが」といった。「いえ、もう充分いただきました」「じゃ、お菓子をおあがり」ほんのりと甘い麦こがしをかじりながら、少年はそこを離れた。河原で一ぱいの茶を飲んだことを、いつかおぼえているだろうか。おぼえていたい、と少年は思った。

通りの両側には、屋台店や、むしろを敷いただけの店が並んでいた。日用雑貨、食べ物の店があった。その間を荷物をかついだ連中がひっきりなしに往来していた。

芝居小屋がいくつも並んでいた。正面にはやぐらがあり、まわりはむしろで囲われていた。中からは太鼓や笛の囃子、歌声、どよめきがひびいてきていた。やぐらの上には太鼓がのっていて、一人の男がそこにのぼっていた。見物客の槍やなぎなたは、ここであずかるらしく、やぐらの上に槍が突き出していた。

やぐらの下には二つの口がならんでいて、一つの口で入場料を払い、もう一つの口から小屋に入るのであった。ここは一人ずつしか入れない小さな入口で、くぐって入らなければならなかった。千利休が工夫した茶室のにじり口は、芝居小屋のくぐり（木戸口）から思いついたのではないかともいわれる。少年は木戸銭を払って、小屋に入った。背中をかがめて低い入口をくぐり、高

いしきいをまたがなければならない。通りの日常的な空間から、ついと内部の劇的な空間に入ってゆく。二つの空間をへだてているのは、一枚のむしろにすぎない。入口の上のやぐらには、鶴を意匠化した丸紋が染めだされた幕が張られている。向い側の芝居小屋には松の丸紋が掛っている。その小屋で公演している一座を幕の紋があらわしていた。

やぐらの下をくぐると、すぐに土間席に出た。正面には、屋根のついた舞台が突き出ていた。左右には屋根のついた桟敷席があった。土間には屋根はなかった。木戸を入ったところには、笠をかぶり、覆面をして、棒を持った数人の男が立っていた。彼らは、小屋に侵入しようとしたり、席で暴れたりする客を鎮める警備人であった。土間席では酒盃を傾けたり、徳利の酒を注いだりしている人がいた。酔って騒いでいると、警備の男につまみ出された。酒瓶や弁当を運んでいる男もいた。

舞台では、男装をした女が身振りをしていた。舞台の脇には、若い役者たちが坐っており、うしろには、太鼓、鼓、三味線などの囃子方が並んでいた。男とも女ともいえないような奇妙な衣裳と激しい動きは、不思議な欲望をかきたてた。それは少年にはまだ未知のものであり、はっきりとつかむことも名指すこともできないものであったが、くっきりとくまどられた女の眼が、ふりはらおうとしても、いつまでも彼の印象にのこった。土間席で彼の前に坐っていた女性から漂う濃い脂粉の匂いが彼をぼうっとさせ、舞台の女の肢体が彼のまなざしをとらえていた。この世には、ぼくが知らない世界が途方もなくひろがっているのだという想いに少年はめまいを感じた。

少年は息苦しくなって、舞台から目をそらし、脇の桟敷を見上げた。そこはいくつかに仕切られており、男女は別のようで、一つの仕切りには三、四人の男たち、または女たちが坐っていた。女は被衣をかぶり、その陰から舞台をのぞいていた。土間席の方は男女入りこみであった。笠を

かぶったまま、扇子や袖で顔をかくすようにした客がいるのは、芝居小屋で顔を見られるのがまずいのだろうか。

やがて舞台は総踊りになり、この回の演技が終った。客はぞろぞろと外に出た。少年も外に出て新鮮な河原の空気を吸った。向い側にも隣にも芝居小屋があった。それぞれの中に、別の未知の世界がひそんでいるようで、少年は好奇心を誘われた。しかし少年は歩きだし、再び四条河原のにぎわいにまぎれていった。

少年は河原を歩きまわっていた。彼は歓楽の巷に酔ったようになっていたが、その背後にあるものにも気づいていた。橋の下や、むしろ掛けの小屋の陰には、闇の世界がひろがっていた。法外の人々、社会から捨てられた人々が河原に生きていた。日が暮れるとこのあたりは危険であった。

四条河原の盛り場を少しはずれると、陰惨な空気がたちこめていた。四条河原は、三条の河原のさらし場と六条河原の刑場にはさまれていたのだ。文禄四年（一五九五）、秀吉は養子とした関白秀次を高野山で切腹させ、その子女、妻妾三十余人を三条河原で処刑した。河原に二十間四方の堀をほり、鹿垣を結いまわし、橋の下南に三間の塚を築いて、秀次の首をさらした。そして河原者たちが、幼い子や女たちをひったててきて、石田三成などの奉行の命で、処刑した。人々は口々に河原者をののしり、あまりに残虐であるといった。そして、これは、三成の陰謀であると噂した。

しかし、その三成も、五年後に、関ケ原で敗れ、六条河原で首を斬られ、三条河原にさらされなければならなかった。処刑やさらし首こそ最高の見世物だった。人間の死ほど劇的なものがあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com